特定非営利活動法人
サヘルの森　機関誌

サヘル

SAHEL
No.106　2020. 6

新型コロナウイルス禍とマリの支援体制 2020

サヘルの森代表　坂場光雄

日本では 4 月初めに出された新型コロナウイルスの緊急事態宣言が、5 月 26 日に解除されました。ただ、全面的に終息したのではなく、感染者は少数ながら増加して、引き続き感染拡大の第 2 波が心配されています。

世界的な感染の広がりは止まらず、600 万人余が感染していると報道されています。アフリカでも感染が広がり、マリ共和国でも 5 月下旬の段階で 1 千人を超え、死亡率は 6%を越えています。マリ政府による感染防止措置として、空港閉鎖、国境閉鎖、夜間外出禁止令、学校閉鎖、集会禁止などの措置がとられてきました。公共施設でのマスク着用の義務化もなされています。

2020 年 3 月現地レポートより
ファナ地域ラミニブグー小学校
生徒たちとユーカリの補植を行う
生徒たちはよく水やりをしている

公衆衛生意識、医療体制が十分ではない国では更なる感染拡大が危惧されています。ワクチン、治療薬がない状態ではヒトとの接触を避けて、感染防止に努めるしかありません。

サヘルの森は毎年日本人をマリに派遣して、現地での緑化活動、里山再生活動等を支援してきました。今年度(2020 年)の日本人派遣の可能性は、今後の状況によってはかなり困難になりそうです。

例年、日本人がマリに不在の期間(10 月～5 月)は、現地のマリ人スタッフが村や学校、荒廃植林試験地等を回り、継続的に補助活動を行ってきました。月 2 回の現地活動の報告は、画像と共に日本に送られてきています。

本年度の現地活動は、今後のマリの感染状況、治安状況を見極め、現地スタッフ、村人の安全が確保できるような形で、連絡を取りあいながら進めていきたいと考えています。当面は現地スタッフに依頼して、地域苗畑での苗の育成、村・学校への苗木配布、里山再生活動支援などを行う予定です。

活動の資金は、皆様の会費や寄付のほか、緑の募金、緑の地球防衛基金などの助成金が決定していますが、もう一つの申請していた助成金がかなわず、資金不足が予想されています。

日本での新型コロナウイルスの緊急事態宣言に伴う、2 か月に及ぶ生産・サービス・消費などの自粛は、経済的に大きな打撃となり、皆様の生活にも大きな影響を引き起こしていると存じます。厳しい経済状況の中ですが、少しでもご支援いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

マリ人スタッフの力、お借りします。

榎本　肇

これまで、日本人スタッフが不在の時は、マリ人スタッフの２名が村々に出張し、里山再生活動をする実践者のフォローや試験地の管理、あるいは学校林の手入れなどを担ってくれています。

今年は新型コロナウイルス感染拡大のため、日本人派遣は非常に難しいため、独り立ちを始めた実践者だけでなく、彼らが負うところは非常に大きくなります。改めて、その２名のスタッフを紹介し、最新の活動をご説明します。

職人集団・マリ人スタッフ

まず、たびたび登場するマドゥ・トラオレさんは、運転手兼通訳兼現場コーディネーター。元々CCA-ONG というマリの NGO 協議会（現在は解散）の運転手を務めていました。その前には、フランス人が行っていた整備士養成校で自動車整備の勉強をしていました。そのため、その辺の運転手とはわけが違い、簡単な修理なら自分でしてしまう、たいへん頼もしいスタッフです。慣れないパソコンに向かい出張の度に報告書を作成し、写真を送ってくれます。

サヘルの森とは、20 年以上の付き合いで、植林や苗木作りの作業にも積極的に関わり、今では日本人スタッフ顔負けの技術を持っています。ナショナルジオグラフィックチャンネルをこよなく愛し、宇宙や自然に興味が尽きないようです。時々、自然に対する彼の洞察にハッとさせられることがあります。

マリ人スタッフのトラオレさん（左）とコニバさん

もう一人は、バマコ事務所の門番兼苗畑管理兼作業補助スタッフのコニバ・ジャラさんです。小さいころからバマコで苗畑を営む叔父のもとで、苗木作りを学びました。今では、接木、挿木など苗木作りに必要な技術は身につけています。珍しい樹木があると採ってきて苗畑の端で育てるほどの研究熱心さ。

一昨年、新しくバマコ大学ができ、発展しつつあるバマコの郊外の地区に引っ越し、新居を少しずつ建築中です。郊外や街の人々に需要のある苗木生産を夢見て、日夜、サヘルの森の仕事を頑張ってくれています。

実践者をサポート

里山再生を担う実践者は、それぞれが持つ里山（耕作地、休耕地、潅木林など）へ自身で育苗した苗木を植えています。

近年は、雨期の始まる前の乾期に植え、潅水しながら降雨を待つと、その後の生育が一段と良くなるとのことで、苗木栽培を早めに始める実践者が増えました。何年も苗木作りを経験して、彼らもだいぶ慣れてきたようです。村では手に入りにくい樹木の種子や再利用の育苗ポットを配布したり、技術的なフォローをしたりして、彼らが地域の中心的な役割を担っていけるように、きめ細やかなサポートを行って独り立ちを助けています。

新試験地を開設

これまで 10 年近く国道沿いで行っていた試験地は、サヘル 104 号でご報告した通り、バマコの住民に売却され、使用できなくなりました。そのため、国道から少し奥に入ったカソマブグー村の荒廃地を借りて新試験地を開設しました。

この荒廃地は、元々作物を耕作していた畑でしたが、土地がやせてしまったため、裸地のまま放置していた場所でした。まずはこの地へ草や枝の束を施し、有機物や土を補足するとともに、在来有用樹の直播や苗の定植などを行って植生回復試験を始めています。

新試験地に施した草木の束

学校林の保護

昨年は 8 校に学校林の育成を行いました。それぞれ、先生や保護者が責任をもって育成に取り組みましたが、植えてはみたもののその後の保護が十分でなく、結局乾期に家畜食害や野火に遭ってしまっている学校も少なくありません。

まずは、数本でも大切に育てようと、村で保護柵を作れる村人から柵を買い上げ、学校に運び保護柵を設置しました。現在は新型コロナウイルスの影響で学校が閉鎖されていますが、再開後は保護者と共に育成管理を行っていきます。

校庭の木に保護柵を設置する保護者

おもしろ在来種～第２弾～
果肉が肉に？～ドゥクラ
(Cordyla pinnata.)

最近、いろいろな村で聞く名前。ドゥクラ。マリの在来の樹木の名前です。ある地域苗畑主は種が手に入れば育ててみたいというほど。どんな木なのか非常に興味がありました。

マリの主食・トウ（穀物の粉を練ったもの）を食べるソースには２種類あります。メインのソースにはバオバブの葉やオクラを細かく刻んだものが入れられ、もう一つのソースには肉や魚を入れ、味の濃いソース（マフェ）に仕上げます。前者に後者を少しずつ加え、食べ進みながら、随時後者を足していきます。

このマフェに入れる肉や魚の代わりに、このドゥクラの実の厚い果皮を入れるのです。食感もわずかに弾力があり、十分に肉の代わりとなります。貴重な肉をなかなか口にできない村での知恵なのです。トウでおなかがいっぱいになり、ごちそうさまをしてから、マフェに入っていた肉や魚を分けてもらうのが習わし。このマフェの味がしみ込んだドゥクラもご馳走の一つなのです。　（榎本肇）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
面白いアフリカの在来種をシリーズでご紹介します。次号もお楽しみに！

アフリカの伝統的な社会の中での平和と寛容

エル・ハッジ・マサンバ ディウフ
（訳・文責　バオバブの会 水野）

「セネガルの人々の寛容性はどこから来るのか」 これは、2019 年 2 月に JICA 横浜で開催されたよこはま国際フォーラムの中で、バオバブの会が行ったセミナーのテーマです。

アフリカといったら、異なる民族間の争い、クーデター、戦争、飢餓、疫病というイメージしか持っていない人々にとっては不思議に思われることかもしれません。多くのメディアが報道しているのは、こういった不幸な事柄ばかりですから。しかし、実際にはこれほどの問題はありません。彼らはアフリカの負の面ばかりを大げさに書きたて、 他の顔を隠し、あえて報道しないのです。それは大変に残念な態度です。なぜなら、アフリカとその歴史の優れた面を無視することは、アフリカは人類の母の大陸、つまりすべてが始まった大陸であることを認めず、知らせないことになるからです。すると、人々は、人類の歴史の重要な部分を知らないことになってしまいます。しかし、いずれにしろ、真実を永久に隠すことはできません。「たとえ、嘘が朝早く出発し、真実は夜に旅立ったとしても、真実はすぐに嘘に追いつく」とニジェールのプルの人々は言います。 まして今はインターネットの時代ですから、隠すことはできません。同じプルでもマリに住む人々が、「背の高い草はホロホロ鳥を隠すが、その叫びを消すことはできない」と言うように。 どの部分であれ人類の歴史の一部分を認めないことは、大きな損失につながります。それを証明するひとつの事実をあげましょう。

人類は、２０世紀に二つの世界大戦を経験したあと、肌の色、出自、属する階層が何であろうと、すべて の人間の権利を認め尊重することがいかに重要であるかを、＜再発見＞しました。それは、１９４８年１２月１０日、国連に於いての「人権憲章」制定として結実しました。多くの人々が、その道の研究者でさえ、これは人類の歴史上初めての人権憲章である、と信じているか、あるいは信じるふりをしています。しかし、 それは誤りです。初めてではないのです。私があえて＜再発見＞という言葉を使ったのはそのためでした。人類初の人権憲章は、１２２２年、マリ帝国のスンジャータ・ケイタ皇帝が、即位式の際、宣言したもので、「マンデン憲章」と呼ばれています。マンデン憲章は、２００９年になって、ようやく、ユネスコの無形および口承遺産として登録されました。１２２２年から１９４８年まで７２６年間！なんと長い時間が失われたことでしょう。このマンデン憲章 は、人間どうしの争いで生じた数多くの惨禍の果てに考察されたもので、その目的は、もう二度とこのよう な不幸を繰り返さないためだったと思われます。それならば、マンデン憲章がたとえ＜野蛮＞だとみなされた人々の中から生まれたものであったとしても、もっと早く注目され、これに値する敬意を払われていたとしたら、たくさんの惨禍が避けられたのでは、と考えることができるのではないでしょうか。二つの世界大戦もなかったかもしれません。残念でした。

さて、表題の考察に戻りましょう。 アフリカの伝統的な社会では、物質的なものより、社会の平和と調和に高い価値を認めています。なぜなら、社会が平和であれば、日々の平安が保証

され、その中で人々は働き、良いものを作り出すことができる からです。そして平和は正義の上にうちたてられますので、アフリカの人々は、正義を確立し、社会の調和を守るための方法を見つけ出そうとします。そのひとつが＜じゃれ合い＞です。

＜じゃれ合い＞とは何でしょう？それは、互いに冗談を言い合い、からかい合い、時には軽く叩いたり蹴ったりすることです。そして、これは許されているというより、むしろやらなくてはいけないものなのです。 どの社会でも、じゃれ合いのような行為は、通常、親子や兄弟姉妹といった、ごく近しい関係の中でしか行われません。しかし、アフリカでは、もう少し関係が遠い人との間、例えば＜いとこ＞との間で行われます。このような関係には少し微妙なところがあり、ねたみの感情や争いが起こりやすいので、じゃれ合いを行うことでそういった負の感情を消散させ、争いの危険を避けるためだと思われます。また、たとえ争いが起こったとしても、じゃれ合いの関係があれば、争いに終止符を打つのも、恨みの感情を消すのも簡単です。時間と共に何が原因で争ったのかわからなくなり、やがて、争いがあったこと自体も忘れてしまいます。セネガルの場合、このじゃれ合い関係は、家族の中で、異なった家族どうしで、そして、異なった民族間に存在します。

セネガル人はしばしば次のようなことを口にします。「セネガル人はみんな親戚どうし」。「セネガルはひとつの家族」。「セネガルの頭はひとつ。二つには分けられない」。口で言うだけではなく、セネガルの人々は本当にそう信じているのです。これが相互理解と寛容性の源になり、ここから、みんなで一緒に仲良く生きていこう！という思いが生まれているのではないでしょうか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

バオバブの会ニューズレター　2019 年度第 2 号
http://the-baobab.org/houkoku/NEWS201902.pdf
★★★★ことわざで開く、アフリカ文化の窓★★★★
第２９回より抜粋

バオバブの会は長年、マリの隣国セネガルで教育支援を行っている NGO 団体です。

会員番号物語（その 16）

東日本大震災後９年の石巻から

岩渕淳二（会員番号 144）

過ぎてしまうとあっという間、覚えていることも少なく、この間いったい何をやってきたのだろうという思いのこの頃です。しかし、震災直後から３週間、妻と共通の友人３人と５人での共同生活の事は鮮明に少々懐かしく思い出します。はじめは、遠くの飲料水給水場に５人で並びそれぞれ持てるだけのポリタンクを持って帰るという生活（砂漠では今でも現実のことかもしれません）。そのうち、それほど遠くないところに井戸のある家があると知り、朝から水汲み、汲めば汲むほど湧いてくるという井戸のおかげで洗濯も可能になりました。電気が通じたのは９日目３月１９日の夜でした。テレビではじめて津波の状況を見て愕然、それまでどんなことが起きているのか全く分からずに過ごして居りました。水道が使えるようになったのはそれからさらに何日も後のことでした。私が住んでいるところは、北上川の河口から１５km 程上流の為津波の被害は無かったのですが、直後は孤立無援、遠くに住む友人の間ではあ

る時期私は死んだことになっていたようです。

ある日、坂場さんから干し芋が届きました。坂場さんって誰？何者？どうして？次の年にも送られてきました。もしやと思い、サヘル通信を見て確認、大変失礼なことを致しました。それまで、サヘルの森通信でメンバーが地道に活動する姿を見るたびに本当に素晴しいと思っていましたが、代表の名前も知らないような名ばかりの会員を続けていました。

１９８０年代中頃、私が３０代半ば新聞でアフリカの砂漠に木を植えようと活動しているグループがあるというのが目に留まりました。すぐに入会しようと思いました。その時、電話で話をしたような気がしますが、「私は歯医者なのだが、何かできることはないだろうか？」と言ったところ、「今はまだないが、将来現地に日本人が住むようになると歯科の出番もあるのではないか」ということでした。私は高校生の時、ジョセフ・ケッセルの少年向け小説「ライオン」を読んで、アフリカに漠然とした興味をもっていました。

数年前、石巻専修大学の依田清胤先生の話を聴く機会がありました。中南米原産のメスキートというマメ科の植物を砂漠化を食い止めるためにスーダンに移植し、その後それがどうなったかという話です。深根性といい根が下へ下へと延びるというので、これは使えるのではと単純に思いました。サヘルの森の中身を知らない者の発想です。

アフリカの植物という事では、昨年秋、興味深いことがありました。

休日に「上品の郷」という近くの道の駅で手廻しオルガンを弾いている友人がやってきて、彼の友人でケニアから薔薇の花を輸入して日本で売り、ケニアに経済援助をしている人が石巻でイベントを企画しているのでぜひ参加してほしいと言うのです。今年の１月、駐日エチオピア大使も来石しイベントが開催されました。隅研吾氏の「ケニアと石巻」という講演もありました。民俗舞踊の団体、アセンコという一弦楽器を演奏するケニアのアーティストと会いましたが、それだけで付き合いが始まったわけでなく残念な気がしています。

もうひとつ最近、意外なことを知りました。

私の大学の先輩で、マリ共和国の農村に居住して、深井戸を掘りトイレットを設け衛生面の生活改善をはじめ、出産や育児の母子指導、マラリアの予防や腸内寄生虫の駆除など保健衛生の改善に努める一方、裁縫教室を開いたりするボランティアを行っている女性歯科医がいることを知りました。経歴を見ると、はじめサハラ砂漠で植林ボランティアとして活動したとあり、もしかしたらサヘルの森ともつながりがあったのではないか？村上一枝さんという方です。

…会員番号は整理のための数字ではない。
会員番号にはひとつずつのドラマと思いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。（サヘルの森）

編注）

・メスキート（Prosopis juliflora.）は、会でもプロソピスと呼んで、主に北部の植林プロジェクトで用い、砂丘の固定にも効果がありました。

・村上一枝さんは、会の活動当初、マリ北部のティンナイシャ村で、ボランティアとして参加されています。その後、カラ＝西アフリカ農村自立協力会という団体を立ち上げられ、現在まで本文にあるようなマリでの活動をされています。
（http://ongcara.org/）

会員総会を実施しました

3 月 29 日に JICA 地球ひろばにて会員総会を実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け、感染防止のため、日程と場所を変更し書面評決による総会へと変更になりました。

4 月 12 日に代表の坂場と、運営委員の榎本がサヘル事務局にて無事に総会を実施致しました。詳細は別紙をご覧下さい。ご協力くださいました会員の皆さまには深く御礼申し上げます。

国内活動（1月～6 月）

＜会員総会＞
・4/12 会員総会（サヘルの森事務所）

＜報告会＞
・3/29　榎本肇　現地活動報告会
＊新型コロナウイルス感染防止のため中止
（JICA 地球ひろば）

＜学校との関係＞
・2/17　横浜市立浦島丘中学校牛乳パック回収
＊4 月の委託式は中止

＜定例活動＞
・1/18　港七福神
・2/15　多摩の桜ヶ丘公園と古神社
・3/14　平林寺と歴史民俗資料館
＊雨天中止
・4/18　小宮公園の雑木林を歩く
・5/16　亀戸水神、大正民家園と荒川堤防
・6/20　庭園美術館、港区郷土歴史館
＊4 月～6 月の定例活動は新型コロナウイルス感染拡大のため中止

＜イベント＞
■みどりとふれあうフェスティバル 2020
＊5/9,10 に日比谷公園で予定されていましたが新型コロナウイルス感染拡大の為中止

定例活動（7 月～12 月）

新型コロナウイルスの感染状況や天候等の事情により急遽中止となる場合があります。ご参加希望の方は必ず事前に事務局までお知らせ下さい。

●7 月 18 日（土）10:30 集合
日野ふるさと歴史館と黒川清流公園
集合場所：JR 中央線・日野駅改札

●9 月 19 日（土）10:30 集合
赤塚公園、浄蓮寺の東京大仏
集合場所：都営三田線・高島平駅西改札

●10 月 17 日（土）10:30 集合
区立美術館の森と中村かしわ公園
集合場所：西武池袋線・中村橋駅改札

●11 月 21 日（土）10:00 集合
サヘルキャンプ
集合場所：相鉄線・瀬谷駅改札

●12 月 19 日（土）10:30 集合
さくらの美術館とめぐろ歴史資料館
集合場所：東急東横線・祐天寺駅中央改札

秋のイベント

通常は 9 月下旬にお台場で「グローバルフェスタ」、10 月下旬には長野県駒ヶ根市で「みなこいワールドフェスタ」が開催されますが、グローバルフェスタは既に今年度の中止が決定しています。

秋のイベントに関して新しい情報があれば、ブログ等でお知らせいたします。

皆様と直接お会いする機会を大切にしてきましたが、双方の安全確保を第一に、コロナ後に皆様と元気にお会いできることを楽しみにしています。

ブログのご案内

機関紙の紙面に掲載しきれない写真や現地スタッフのレポートの一部などをブログでご紹介しています。

マリの植物や生活コラムなどもありますので、是非ご覧下さい。

サヘルの森スタッフブログ
https://sahelnomor.exblog.jp/

サヘルキャンプ

昨年とても好評だったサヘルキャンプを今年も実施予定です（新型コロナウイルスの感染拡大状況や天候によっては中止の可能性があります）。

会員交流、自然観察、技術研修等を目的としています。マリで実施した「里山再生実践者研修」の一部プログラムを体験することができます。お昼ご飯は皆で協力してトゥアレグ風炊き込みご飯やバーベキューで楽しみます。電気を使わない生活を体験してみましょう。

急な予定変更に備え、ご興味のある方は早めに事務局までその旨お知らせください。

日時：2020 年 11 月 21 日（土）
　　10：30～15：00　（瀬谷駅 10：00）
場所：中屋敷作業場　＊駐車場有り
　　（横浜市瀬谷区中屋敷）
参加費：おとな（中学生以上）1500 円
　　小学生　500 円
　　（食費、保険料込み）
持ち物：長袖長ズボン、軍手、飲用水
　　帽子など

七夕募金のお願い

新型コロナウイルスの終息とマリの平和を願って、毎年恒例の七夕募金への御協力をお願いします。

今年度は助成金の収入も減り、イベント出展も見込めないことから、大変厳しい状態です。

日本人の派遣も難しい状態ですが、現地スタッフや過去にサヘルが行った「里山再生実践者研修」を受講した実践者たちが中心となって苗木の生産や配布などの事業を継続しています。

学校林も着実に木が生長し、子どもが関心を持って木の世話をしている学校もあります。

これらの素晴らしい成果や取り組みに対する歩みを止めず一歩一歩進めていくために、どうか皆様のご協力をお願い致します。

同封の振り込み用紙をご利用下さい。

苗木募金で里山再生

苗木募金は一口 500 円から受け付けています。500 円で、アフリカでは 2 本の苗木を村人に届けることができます（スタッフの派遣費用も含める）。

募金の際は「苗木募金」と明記下さい。

2019 年 6 月　苗木を手に微笑む子ども
ファナ地域　シラネケレンジェ村

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

・一般会員　　年　5,000 円
・維持会員　　年　20,000 円

特定非営利活動法人 サヘルの森
住所：〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3-403
TEL：042-721-1601　（留守電対応）
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP:　http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG:　http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail:　sahel-no-mori@jca.apc.org

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
機関誌『サヘル』No. 106　2020 年 6 月 23 日発行
発行人：坂場光雄　／編集：榎本肇
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊